

『つながる世界』～知ろう考えよう、世界と日本のこと～

2017年4月 国際交流・図書

「グローバル化」と「情報化」が進む現代、多様化する社会で私たちは自ら問題を見つけ、考え、そして行動することが求められています。その一方で「日本の若者は内向き志向」、「大学生の半数は読書時間が0分」といった報道も目にします。

そこで今年度は国際交流&図書の担当Tが、本校や近隣の図書館の本棚から世界を知る手がかりを紹介します。身近なことから少し難しい事柄まで、様々な話題を提供したいと思います。「世界はいろいろなところでつながり、それは自分にもつながっている」、少しでもそんなふう感じていただければ幸いです。

ギョーザはグローバル食文化のさきがけ？ ～餃子をめぐる世界の旅～

中国発祥とされるギョーザ（餃子）。日本でもおなじみですね。小麦粉を練って薄く伸ばした皮に肉や野菜を包んで調理した「ギョーザ状」の食べ物は、実は世界各国にあります。地域によって名前は異なり、中国では**チャオズ（ジャオズ）**。韓国では**マンドウ**。東欧を旅行中、スロバキアで**ピロヒー**を食べたTは「ヨーロッパでギョーザ？」と思いました。しかし、次のポーランドでジャムの入った甘いギョーザ（**ピエロギ**）を口に入れたときは、「ん？ これはもはやスイーツ…」とうなってしまいました。

旅先で出会った料理を日本で再現し提供する「旅の食堂」。そこを営む夫婦の『世界まるごとギョーザの旅』は食と旅を大いに楽しめる「満腹感保証」の1冊です。取材対象の料理を決め、行き先や日程を計画し、交通機関や宿、そしてビザの手配まですべて自分たちする、これぞまさに旅の王道です。そしてこういう旅だからこそトラブルもあれば現地の人々との出会いや語りもあるのです。

食べ物は人を介していち早くグローバル化したものではないでしょうか。食のグローバル化の代表選手はマクドナルドと言われて久しいですが、はるか昔から様々な食べ物が世界をかけめぐり、名前や多少の変化はあるものの地域の料理として根付いてきたことが本書を読むとわかります。そして、現在では関係のよくない敵対する国の間でも、食文化に関しては共通点がけっこうあるのです。

「食」は人と人を、国と国とをつなげる大切なものではないでしょうか。

《調べてみよう！》世界にはまだまだギョーザ状の食べ物がある。名前や調理法を調べて分類すると、ちょっとした論文になるかも。（ヒントは本書の中にも）



スタン系の国、いくつ知ってる？ ～中央アジアの未知の領域～

ギョーザの本ではウズベキスタンやカザフスタンといった中央アジアの国々が登場します。さて「～スタン」という国の名前、あなたはいくつ答えられますか？ よく耳にするのはアフガニスタンやパキスタンですが、まだまだ序の口です。

『ウズベキスタン日記』は料理家・文筆家の高山なおみの旅日記。ウズベキスタン人のガイド（通訳）の女性と旅をするのですが、言葉が通じる通訳よりも言葉の通じない現地の人々との方が、コミュニケーションがうまくいっているような場面がありました。文化の違いとはどういうものかを考えさせられると同時に、異文化の中にも人間としての共通点があり、人が交流することのヒントにもなるような本でした。

印象的だったのは、上を向かなくても目の高さまで広がる満天の星空。人工的な灯りのない本物の闇と、地平線までさえぎるものがない地形、そして砂漠のような乾燥地帯、そういう条件がそろった所では宝石箱をひっくり返したような夢の星空が見えます。ウズベキスタンは無理でもオーストラリアの内陸部なら行けるかも。

《調べてみよう！》ウズベキスタン、カザフスタン、トルクメニスタンなど一連のスタン系の国々の「スタン」にはどういう意味があるのだろうか？

日本人が建てた砂漠のオペラハウス ～戦争が残した遺産～

ウズベキスタンの夢のような星空を70年余り前に見ていた日本人が大勢います。第二次世界大戦後、満州にいた多くの日本兵が捕虜としてシベリアに送られました。膨大な死者を出したことから、苛酷な面が語られることの多い「シベリア抑留」ですが、『日本兵捕虜はシルクロードにオペラハウスを建てた』という本は、兵士の一部がウズベキスタンに送られ、旧ソ連を代表するオペラハウスを建設した記録です。

本書はこのオペラハウスが大地震に耐え、人々から称賛された話から始まります。地震国の人間だからこそ出来た建築ともいえるでしょう。そんな話から、今でも国際貢献の方法はいろいろありますが、他の国と同じやり方ではなく、日本だから出来ることにもっと目を向けてもよいのでは、と感じました。

《調べてみよう！》日本ならではの国際貢献とは具体的にどのようなことだろうか？ 日本の歴史や国民性から考えられる日本の得意分野は？

